

P-089

日赤薬剤師会「薬剤部の活動状況調査」2.薬剤管理指導業務等の過去との比較

諏訪赤十字病院 薬剤部¹⁾、日赤薬剤師会薬剤業務委員会²⁾

○跡部 治¹⁾²⁾、矢野 光²⁾、大竹 弘之²⁾、板谷 一成²⁾、八巻 俊雄²⁾、藤掛 佳男²⁾、森 一博²⁾、津田 正博²⁾、青山 平一²⁾、町田 毅²⁾

【はじめに】病院薬剤師を取り巻く環境が大きく変化している渦中で、医療の合理化、医療の質の保証や安全な医療の提供が求められている。病院薬剤師にも薬剤管理指導業務、プレアポイド報告等今以上にさらに充実することを求められてきた。このような背景の中で、日赤薬剤師会では薬剤業務についてのアンケート調査を実施し、全施設の業務内容・業務量を集計し、さらに過去との比較を出した。第2報では薬剤管理指導業務、プレアポイド実施状況等について述べる。

【方法】1.アンケート方式2.対象：全国赤十字病院(分院含)93施設3.調査実施月：平成24年10月

【結果】薬剤管理指導業務では実担当者1人当たりの薬剤管理指導1ヵ月算定件数の全国平均は67.3件であった。また、総入院患者に対して70%以上の患者に服薬指導を実施していると回答した施設数は16(17%)であった。一方、病院薬剤師の職能アピールができ、地位向上に繋がると思われる日病薬へのプレアポイド報告を実施している病院は全体の42%で、年間100件以上報告は6施設であった。病棟で薬剤師が入院患者の配薬業務を実施している施設数は28(30%)であった。簡易懸濁法を実施している施設数は64(69%)と年々増加していた。

【考察】医薬品の適正使用を通じて薬物治療の質的向上に寄与するには、薬剤管理指導業務が最も重要な業務であり、患者や他の医療従事者にも理解されやすく、しかも、診療報酬上からも高く評価されている。しかし、その算定件数や稼働率には病院間でバラツキが見られている。医療安全が叫ばれている昨今、病院薬剤師の病棟での活躍はこれまで以上に充実化したものにしていかなければならないと考える。

P-091

長野市禁煙支援ネットワーク構築への取り組み

長野赤十字病院 薬剤部¹⁾、看護部²⁾、職員健康管理室³⁾、栄養課⁴⁾、感染症内科⁵⁾

○関口 光子¹⁾、早川 公子²⁾、千村 葉子²⁾、徳竹 理香²⁾、島田美奈子²⁾、木内 才子³⁾、池田千鶴子⁴⁾、橋本 典枝⁴⁾、東方千恵美⁴⁾、小林 智子⁴⁾、増渕 雄⁵⁾

【はじめに】長野市薬剤師会より依頼があり、市内の禁煙支援薬局を立ち上げるにあたり、病院の禁煙外来との連携目的で「長野市禁煙支援ネットワーク研修会」が開催された。

【目的】生活者の最も近くにいる医療人として、喫煙による疾病を減らすという社会的役割を担い、禁煙補助薬調剤時に禁煙支援をする。

【対象】長野市内調剤薬局(230軒)

【方法】長野市禁煙支援ネットワーク研修会の開催

(1)長野赤十字病院禁煙サポート外来の現状紹介

- 1)日本の現状：2003年施行健康増進法 第25条「受動喫煙の防止」
- 2)「タバコを吸うと、どうしてニコチン依存症になるの？」
- 3)禁煙外来受診時の流れ
- 4)禁煙支援における栄養士の関わり
- 5)禁煙指導 人間ドックでの働きかけ
病院職員に対する働きかけ

(2)長野市薬剤師会 学校薬剤師会長から趣旨説明

【禁煙支援ネットワーク研修会の参加状況】21名の調剤薬局の薬剤師参加があった。

【今後の課題】禁煙補助薬が院外処方箋で発行され、調剤薬局で薬剤管理や禁煙意欲の維持のための支援が受けられる事は、禁煙継続上重要と考えられる。学校薬剤師としてタバコの害を教育し喫煙開始を防止する防煙教育が、調剤薬局での禁煙支援に繋がるよう、ネットワーク研修会を継続していきたい。

P-090

当院における持参薬運用の現状～お薬手帳編～

益田赤十字病院 薬剤部¹⁾、益田地域医療センター医師会病院²⁾、益田市薬剤師会³⁾

○村上 裕葵¹⁾、宅江 孝修¹⁾、吉田 勝好¹⁾、郷原 学¹⁾、西迫 多重²⁾、西園 憲郎³⁾、大庭 信行³⁾、高村 洋³⁾

【目的】近年、医療安全や経済面から持参薬管理業務は非常に重要となっている。当院においても持参薬関連の業務が増加し、持参薬に関するヒヤリハット事例も報告されており、適切な運用が課題となっている。今回、持参薬運用の現状を把握し、課題を確認するため調査を行った。

【方法】当院の平成23年及び平成24年の薬品鑑別件数、ヒヤリハット、及びプレアポイドの報告状況を調査した。さらに当院薬剤師に対して、持参薬鑑別業務に関するアンケート調査を行った。

【結果】平成24年の薬品鑑別件数は2350件で、前年より約400件増加していた。平成24年の薬剤に関連したヒヤリハット報告件数は127件と前年とほとんど変化がなかったが、持参薬に関連したものは15件で、前年よりも大きく増加していた。平成24年のプレアポイド報告件数は166件で、持参薬に関連したものは28.3%で、前年と比較して約10%増加していることがわかった。さらにアンケート調査の結果、鑑別時には紹介状やお薬手帳、カルテから患者の使用薬剤の情報を得ており、お薬手帳が最も情報を得やすい方法であると全員が回答した。

【考察・目標】今回の調査の結果、薬剤鑑別件数とともに持参薬関連のヒヤリハットやプレアポイドの報告が増加していることが分かった。また後発品の普及により、カルテや紹介状、診療情報提供所に記載された薬剤名と、持参された薬剤名が異なる場合が増加していることが考えられ、情報ツールとしてのお薬手帳の有益性が改めて認識できた。この結果を踏まえ今年度から開始された持参薬ワーキンググループ(医師、看護師、薬剤師、事務)の活動にも役立てていきたい。

P-092

被災地における初期の他施設内トリアージエリアでの活動

飯山赤十字病院 薬剤部¹⁾、前橋赤十字病院 薬剤部²⁾、長野赤十字病院 薬剤部³⁾

○滝澤 康志¹⁾、佐々木伸一¹⁾、柴本 和也¹⁾、安岡 信弘¹⁾、丸岡 博信²⁾、松澤 資佳³⁾

【目的】東日本大震災が発生し、多くの救援班が出動し薬剤師も活動をおこなった。一部の薬剤師はイエローエリアに入り活動をおこなった。他施設のイエローエリアで薬剤師が活動をおこなう際の介入の仕方や必要性明らかにすることを目的とした。

【方法】薬剤師が救護班に配属されてイエローエリアで活動をおこなった3赤十字病の救護班のスタッフ(医師、看護師、主事)に対して薬剤師の活動についてのアンケートをおこなった。無記名にて、職種、薬剤師がいて評価できた点、改善が望まれる点などの項目について調査した。アンケートは各施設にメールにて配付し回収した。

【結果】3施設、17名から回答が得られた(回収率100%)。全てのスタッフが救護班に薬剤師が参加した方がいいと回答された。薬剤師がいて評価できた点としては、的確な処方のアドバイスをいただけ、使用したい医薬品がわからない時に相談ができて良かった。看護師が看護に専念できた、被災者からの薬の相談に対して薬剤師が直接相談していただいて良かった等であった。改善が望まれる点では、エリア内での薬剤師の立場の確立が必要。薬剤師の混注時に薬剤師と看護師でダブルチェックをおこなえる様な体性作りが必要、トリアージタックのような専用処方箋も必要かも知れない、医師1人に対して薬剤師が1人必要だと思いました等であった。

【考察】活動をおこなった救護班の全てのスタッフは薬剤師の介入が必要と回答されていた。これは、薬剤師がいる事で評価できた点にあるように医薬品の適正使用に貢献でき、各職種の業務の軽減にもつながった事が示唆された。薬剤師は救護班に積極的に参加し医薬品の適正使用に関与することが大切であると考えられた。